

スローな旅で得られた濃厚な旅情

橘 左京 作

鉄道や路線バスなど公共交通が発達していない地方に住んでいると、通勤や買い物、病院などに車を使う機会が多い。地方で暮らす人にとって車は生活必需品だ。旅行に出掛ける時も、公共交通を使うよりも車の方が何かと便利だ。車を使えば時間を無駄にせず、目的地に直行できるし、帰りも直帰できる。観光地では車に旅行鞆を置いて手ぶらで散策できる。また一台の車を数人で使えば燃料費など一人当たりの交通費も割安になる。効率性、利便性、経済性から考えると、公共交通よりも車の方に軍配があがる。車を使った旅行にはこのような長所がある反面、短所もある。あそこも見たい、ここも見たいと、観光地をてんこ盛りにしたバスツアーに参加したことがあるが、どうしても一か所あたりの滞在時間は短くなってしまい、多くは土産物店での買い物に費やされる。また、観光地に着くたびにバスを降り降りしなければならぬ煩わしさもある。観光地をたくさん見て回った割には、疲れだけが体に残って、思い出として残った場所がなかったということもある。

独身時代にローカル線の列車に乗って、二泊三日のスローな旅を楽しんだことがあった。私が計画したスローな旅というのは上信越線、只見線、磐越西線で結ばれた三路線を一周する小旅行だった。新津駅、小出駅、会津若松駅が三路線の乗換駅になっている。これら三路線は新潟県と福島県の県境を囲むようにトライアングルを形成している。この三角地帯は年間の平均降雪量が十メートルを超える豪雪地帯だ。山間部に大量に積もった雪が融雪期になると水となって只見川や阿賀川、阿賀野川へと注いで、水資源となって水力発電や農業用水などに利用されている。

私がローカル線の列車に乗って旅を試してみたいと思ったのは、小学六年生の時に蒸気機関車（SL）に乗って出掛けた修学旅行が忘れられない旅の思い出として残っていたからだ。修学旅行では最寄り駅からSLに乗って、新津駅を経由して磐越西線に入り会津若松駅までの間を往復した。当時、磐越西線で走っていたSLが今では観光客向けの列車として週末や祝日に新潟駅と会津若松駅までの間を往復運行している。私の実家は鉄道の沿線にあったので、列車は路線バスと並んで身近な公共交通だった。私が子供の頃に鉄道を走っていた機関車のほとんどがSLだった。ディーゼル機関車はまだ少なく、鉄道が電化

されていなかった。今は廃校になったが、私が卒業した小学校は鉄道沿線にあり、写生の時間に「デ・ゴいち（D五二）」を描いたことがあった。何両も繋いだ貨物車両を引っ張る二両編成のデ・ゴいちの真っ黒なボディと煙突からモクモクと立ち昇る灰色の煙を見ながら、デ・ゴいちの力強さを絵の具で表現したかったが、色使いに失敗して迫力に欠けるデ・ゴいちの姿になってしまい、がっかりしたことを覚えている。

私がトライアングルなローカル線の旅に出掛けたのはハッピーマンデーが導入された平成十二年の十月だった。この年から十月十日の「体育の日」が十月の第二月曜日に変わって、土日を含めた三連休になった。この三連休を利用して二泊三日の小旅行を計画した。新津駅で上信越線の上り電車に乗り込みスローな旅が始まった。老若男女の乗客の多くは、みな地元の人たちだ。背中にリュックサックを背負った私自身も、どこにでもいる普通のおじさんだ。誰が見ても私が旅行者だとは気づかなかっただろう。私が乗った列車は長岡駅止まりだった。長岡駅から先の小出駅方面に向かう次の列車が出るまでは小一時間ほどの待ち時間があったので長岡駅で途中下車し、街歩きをすることにした。

駅を出ると駅前の道路は歩行者天国になっていた。何のイベントだったのか覚えていないが、広い道路は地元の人たちで埋められていた。道路の両脇にはたくさん露店が軒を連ねて並んでいる。地元の人たちは露店で買った食べ物を路上にセットされたテーブル席で食べていた。折しも「天高く、馬肥ゆる秋」の日和だ。私も早速、ご当地グルメの「洋風カツ丼」と地酒を買って味わった。「洋風カツ丼」はタレに特徴がある。ケチャップベースの「洋食系」とデミグラスソースの「食堂系」があつたが、私は「食堂系」を選んだ。思わず「うまい！」とつぶやき、退屈なはずの待ち時間が思い出に残る時間に変わった。私にとって「旅の楽しみ」と「食べること」はニアリー・イコールの関係にある。

小出駅で電車を降りて只見線のホームで待っている会津若松行きの日エール列車に乗り込んだ。二両編成の車内には地元の人と思しき数人の乗客が座って出発時刻を待っていた。上信越線の電車は四人掛けの座席配置だったが、只見線の列車は車両の両側に沿って並べた長い座席配置だった。間もなくして長岡駅行きの下りの電車が小出駅のホームに入ってきた。電車から大勢の若者が降りて会津若松行きの列車に乗り込んだ。背中にリュックサックを背負った若者、肩に旅行鞆を掛けた若者。一目で学生の旅行者であることが分かった。学生たちのなかに数人の留学生を見つけた。流暢な日本語で会話している。座席

は学生たちで埋まり、吊革につかまって立っている若者もいる。空席だらけのガラガラの車内がぎゅうぎゅう詰めになって、さながら都会の通勤電車のような。若者たちが交わす会話を聞いていると、どうやら東京から新幹線に乗って浦佐駅で上越線に乗り換えてきたらしい。

満員になった二両編成の列車が小出駅を出発した。若者たちは会津若松駅まで行くようだが、私は途中にある会津柳津駅で降りて駅近くにある小さな温泉宿に向かった。柳津町は日本三大虚空蔵の一つ福満虚空蔵菩薩圓藏寺を中心として栄えた門前町だ。また街の中を只見川が流れている。私は一人旅をする時は家族経営の旅館か民宿に泊まることが多い。個室が確保しやすいことと、食事などのもてなしから家庭的な雰囲気味わえるからだ。予約しておいた温泉宿に着くと浴衣に着替えて自慢の露天風呂に入った。まだ早い時間帯だったので、露天風呂に入っている客は私一人だけだった。独り占めした風呂場から秋の風景を楽しみながら、旅の疲れを癒した。夕食の時間になったので大広間に行くと、十五畳ほどある広間に宿の主人と数人の客が囲炉裏を囲んで座っていた。囲炉裏にはこんがりときつね色に焼けたイワナの串焼きが立ててある。香ばしい匂いが部屋中に漂っていた。自在鉤にはキノコや里芋など旬の野菜が入った鍋が掛けられてグツグツと音を立てている。郷土料理と地酒を堪能しながら、宿の主人と初対面の旅人が歓談しながら至福の時間が流れた。

翌朝、宿を出た私は会津若松駅行きの列車が来るまでの待ち時間を使って圓藏寺を訪ねることにした。私が寺に着くや、貸し切りバスから降りた団体客が境内を足早に歩いて「撫牛像」を手で触って立ち去った。この「撫牛像」は会津地方の民芸品「赤べこ」の起源とされている。寺を建造する難工事に際に現れた赤牛の活躍で寺は無事に完成したと言われ、撫でると幸せを運ぶと伝えられている。私は一団の観光客が立ち去って静かになった境内をゆっくりと散策し、紅葉で色づき始めた木々を眺めながら秋の風情を楽しんだ。また観光客が立ち去って退屈そうに横たわる「撫牛像」の全身をゆっくりと丁寧に磨りながら幸せ気分浸った。余った分はお土産として持ち帰ることにした。駅に向かう途中にある土産物店に立ち寄って柳津名物の「あわまんじゅう」を味わった。「あわまんじゅう」はその昔、災害が相次いだ圓藏寺がもう災いに「あわ」ないようにと、地元の人たちがあわで作ったまんじゅうを寺にお供えしたことが起源とされている。

柳津駅から列車に乗って次の目的地である会津若松駅に向かった。乗客は地元の人たちばかりで旅行者は私だけだった。次の駅で大きな風呂敷包みを背負ったおばあさんが乗り

込んできた。前掛け姿のおばあさんは座席に腰を下ろすと大きな風呂敷包みを脇に置いた。どうやら、おばあさんは行商人のようだ。この時私は、子供の頃に置き薬を家庭に届けに来た富山の薬売りのおじさんを思い出した。薬売りは鉄道を使って行商していたようだ。帰りぎわに薬売りから紙風船をもらったことを覚えている。

会津若松駅にはお昼前に着いた。駅からはレンタル自転車を漕いで鶴ヶ城に向かった。有名な観光地ということもあって、城内に入ると貸し切りバスを降りた団体客で賑わっていた。鶴ヶ城は車で何度も訪ねたことがあったので、城内をさーと見学した後、近くの食堂に入ってご当地グルメの「ソースカツ丼」を味わった。午後、会津若松駅から磐越西線の列車に乗って二日目の宿泊地がある喜多方駅に向かった。駅前のレンタルショップで借りた自転車を漕いでホテルに向かった。チェックインを済ませた後、夕刻の喜多方の街を散策しながら郷土料理が食べられる店に入って、棒鱈料理、こづゆ、鯨の山椒漬けといった喜多方の代表的な郷土料理を地酒と一緒に味わった。

三日目はレンタル自転車を漕いで蔵巡りを楽しんだ。喜多方は蔵の町として知られているが、市街地だけでなく郊外の集落まで含めると四千棟余りの蔵が建っているという。これらの蔵は酒類、醤油、味噌などを醸造するための「工場」だ。蔵はこの町に暮らす人々の生活の場であり生業の場だ。喜多方にある蔵はみな個性的で、白壁、黒漆喰、粗壁、レンガなど、種類や扉の技巧にいたるまで造りや意匠に工夫が施されているという。市街地にある造り酒屋の蔵を訪ね地酒を試飲したが、蔵だけではなく地酒にも個性豊かな風味を感じた。郊外の農村集落に建っている蔵は米などの農作物の貯蔵施設として使われているようだ。どの蔵にも個性が滲み出ている。お昼はご当地グルメの「喜多方ラーメン」を味わった。「喜多方ラーメン」は札幌ラーメン、博多ラーメンと並んで日本三大ラーメンの一つに数えられている。新潟でも「喜多方ラーメン」が食べられるが、地元産の醤油を使ったコクのあるスープと太いちぢれ麺が特徴の本場の「喜多方ラーメン」は、ほかとは一味もふた味も違う。終日かけての蔵巡りを終えた後、喜多方駅から「S L 磐越物語号」に乗って帰路についた。

ローカル線で旅をしたスローな三日間であったが、車を使った旅では得られない濃厚な旅情があった。観光地には、そこを訪ねる観光客にとって、生活と切り離された空間があり、日常とは異なる時間がある。一方、観光地の周りには地元で暮らす人たちの生活があり日常がある。車で旅をすると観光地というスポット（点）だけが旅の印象となつて記憶

される。しかし、ローカル線で旅をすると、観光地（スポット）だけでなく観光地と観光地を結ぶライン（線）が出来上がる。このライン上に地元で暮らす人たちの生活や日常が見えてくる。その結果、スポットとラインが合わさって濃厚な旅情が生まれ記憶される。

2020年には二回目となる東京オリンピックが開催される。1964年に開催された一回目の東京オリンピックでは、高度成長期の日本の姿を世界に発信できた。2020年開催予定の二回目はどんな日本の姿を世界に向けて発信できるのだろうか。東京オリンピックの開催によるインバウンド効果が期待されている。地方には有形・無形な日本の原風景がたくさん残っている。訪日する外国人観光客には、世界遺産に登録された著名な観光地だけでなく、日本の原風景が色濃く残る地方にも足を運んでもらいたいものだ。（了）